



HIV 感染症/エイズ診療における障がい者福祉制度適用の現状把握と改善 — 血友病薬害被害者および HIV 陽性者の長期療養生活を支援する MSW の支 援体制に関する研究 —

研究分担者 葛田 衣重

千葉大学医学部附属病院 地域医療連携部 技術補佐員

研究要旨

血友病薬害被害者（以下被害者とする）および HIV 陽性者の長期治療生活を支援するため、地域連携の要となるブロック拠点病院 MSW が中心となり、中国四国ブロックと北陸ブロックで啓発研修を実施した。さらに地域を狭め中核単位での試みとして千葉県でも実施した。参加者は3会場合計で165名、いずれの会場も女性が半数以上を占め、年代は30-40代で6割（北陸会場はデータなし）、職種はMSW、PSWと看護師で7-8割、所属は病院が半数以上を占めた。参加者の多くから満足と高い評価を得、地域の実態と支援のニーズを満たす研修の有効性が認められた。ブロック毎の課題を取り上げた研修を推進する。

被害者の個別支援を促進するため、拠点病院で支援を担当する外来看護師とMSWを対象に、ブロック拠点事業に薬害被害者支援担当者会議を取り入れ実施した。会議ではPMDA事業の説明、被害者の生活課題の共有、支援の検討、支援者間のネットワーク構築を行った。看護師やMSWの面接時に利用する簡便なアセスメントシートの必要性が明らかとなった。

A. 研究目的

被害者および HIV 陽性者には、長期にわたる治療の合併症、高齢化に伴う非 HIV 疾患の発症や生活習慣病、要介護状態などがみられるようになってきた。そのため HIV 専門医療に加え、診断に沿った医療、生活支援が必要となり、拠点病院は地域での医療と生活を支える専門職や専門機関との連携を強化している。また全国の被害者と HIV 陽性者の居住分布には大きな偏りがあり、かつ地域の社会資源や地域文化、価値観は多様なため、それぞれの生活実態とそれに基づく医療や生活ニーズを把握したうえで支援する必要がある。

- (1) 地域の実態と課題を把握しているブロック拠点病院 MSW が中心となって研修を企画運営し、参加者の意見からプログラムの妥当性を検討し、支援の質向上を図る。
- (2) 被害者への適切な支援のために、被害者支援の課題を共有し、支援者担当者間のネットワークを構築する。

B. 研究方法

(1) ブロック単位・中核単位での啓発研修

人権擁護を切り口とし、被害者および HIV 陽性者の生活支援の実際と課題の共有、課題の検討を目的に、地域生活を支える専門職を対象とし全国2カ所（中国四国ブロック、北陸ブロック）で実施した。研修プログラムはそれぞれのブロック拠点病院 MSW が中心となりコアメンバーを選定し作成した。内容は講義（人権擁護と HIV 陽性者支援、最新の医療知識、社会資源、被害者から支援者へのメッセージなど）と演習で構成し、演習は全国ブロック拠点病院等の MSW をファシリテータに配置し、支援の質向上についてグループワークを実施した。研修後、参加者にアンケート紙を配布し、感想や学び、今後の行動宣言などを記載させた。研修は公益社団法人日本医療社会福祉協会（MSW の職能団体、会員数約 5,500 人）と共催し、案内および参加者募集はブロック拠点病院のネットワークと日本医療社会福祉協会のネットワークを利用した。さらに

同協会の認定医療社会福祉士の認定ポイントが付与される研修に位置づけた。

研修目的を同じくし、中核単位として千葉県でソーシャルワーク3団体（一般社団法人千葉県医療ソーシャルワーカー協会、一般社団法人千葉県精神保健福祉士協会、一般社団法人千葉県社会福祉士会）と共催して研修を実施した。プログラムは3団体の研修担当委員と中核拠点および県内一般拠点病院MSWで検討し、ブロック単位で行う内容とほぼ同じとした。研修担当委員会では、HIV陽性者支援の経験のないSWの参加が見込まれるため、当事者の語り・支援者へのメッセージが強く望まれた。

- 中国四国ブロック：2018/10/7（日）9:00～15:30
広島大学病院にて
平成30年度 中国四国ブロックエイズ拠点病院 HIV/AIDS ソーシャルワーカー研修会
テーマ「社会で自分らしく働くために～HIV陽性者の就労支援から学ぶ～」
- 北陸ブロック：2018/12/16（日）10:00～17:00
石川県立中央病院にて
平成30年度 北陸ブロックエイズ拠点病院 ソーシャルワーク・カウンセリング研修会
テーマ「歴史を踏まえソーシャルワークを語ろう」
- 中核地域（千葉県）：2018/11/4（日）11:00-16:30
ペリエホールにて
2018年度 千葉県ソーシャルワーカー三団体合同研修「地域で生きるを支援する」
テーマ「明日出会うかもしれないHIV陽性者のために、今できることを考えよう」

(2) 薬害被害者支援担当者会議

拠点病院で生活支援を担当する外来看護師とMSWを対象とし、PMDA事業の説明、被害者の現状、支援の実際と課題の共有、支援者間のネットワーク構築を目的に全国8ブロックで実施した。

C. 結果

(1) ブロック単位・中核単位での啓発研修

①参加者の属性

3会場ともに、参加者の性別は女性が多く、年代は30代と40代で6割（北陸会場はデータなし）、職種はMSWおよびPSWが最も多かった。所属は拠点病院を含む病院が半数以上を占めた（表1）。中国四国会場ではテーマが就労支援であったため、就労支援者や関連する事業所の参加がみられた。千葉地域は、千葉県のソーシャルワーカー専門職団体の合同研修のため、参加者には社会福祉協議会や地域生活支援センターなど医療領域以外の所属がみられた。支援経験と研修受講で会場に違いがあった。中国四国会場では支援経験ありが支援経験なしを大きく上回り、研修受講ありも受講なしを大きく上回った。北陸会場では支援経験ありを支援経験なしが上回り、研修受講ありが受講経験なしより多かった。千葉会場では、支援経験ありが支援経験なしを上回り、研修受講経験なしが受講経験ありを上回った（表2）。これは非拠点病院等で陽性者支援が行われていることを示しており、具体的には「精神科病院で薬物依存の支援」「非拠点病院から拠点病院への受診支援」「回復期リハ病院での退院支援」「市役所での陽性被保護者への支援」などがみられた。陽性者の様々な局面に拠点病院だけでなく、地域のソーシャルワーカーや行政担当者が介入している実

表1 中国四国ブロック・北陸ブロック・千葉地域における参加者数、参加者の性別、年代、職種、所属

会場	参加者 (人)	性別 (%) 女性	年代(%)				職種(%)			所属(%)			
			30代	40代	50代	20代	MSW/PSW	NS	CM	拠点	一般	居宅	施設
中四国	62	76	27	36	17	20	56	18	9	90	0	1	
北陸	58	62	—	—	—	—	83	4	2	45	41	2	0
千葉	45	58	38	29	13	11	73	2	2	35	20	2	0

表2 参加者の支援経験と研修受講の有無

会場	支援経験(%)		研修受講(%)	
	あり	なし	あり	なし
中四国	63	34	68	32
北陸	33	57	52	48
千葉	53	40	40	56

態があり、研修対象と研修内容をマッチングさせる重要性が明らかとなった。

②研修プログラムの妥当性

受講アンケートの意見や感想として、中国四国会場では「最終的には『人』だな、と思った。病気からではなく、ひとりの人として接していきたい」「社会にHIVの就労についての啓発の仕方を学んだ」「当事者の就労についての思いや気持ちの変化を知ることができた」など、就労支援をテーマとし、グループワークで当事者の就労プロセスを行動と気持ちに分けて丁寧に通ることにより、陽性者の就労支援が非陽性者の支援と変わらないことを学んだ。

北陸会場は、長年HIV/AIDSの権利擁護やアドボカシーに取り組まれていらした小西加保留先生の講義を中心とし、パネルディスカッションでは石川県立中央病院のソーシャルワーカーとして拠点立ち上げから現在のブロック体制を構築されてきた山下美津江氏と、同時代を東京医科大学病院ソーシャルワーカーとしてマイクロ・メゾ・マクロレベルに渡り活動された藤平輝明氏の講演からHIV/AIDSの歴史と支援の流れから学びを深める研修となった。参加者の多くから人権擁護について改めて学ぶ機会を得たという評価がみられた。「拠点病院ではないためなかなか機会がないが、人権問題について改めて考えなおされた内容だったため、支援全般に役立つと思った」「一から学べるプログラムになっており、歴史的なことも含めて学び知識が深まった」。同会場の研修のねらいが達成された。

千葉会場では「HIV陽性者に初めて出会った」「近くに拠点病院はあっても、その活動を知ることは少なかった」「マイノリティ、HIVについて自分は何も知らないことに改めて気づいた」など、非拠点のソーシャルワーカーや医療領域以外のソーシャルワーカーに対するこれまでの周知・啓発が不十分であったことが浮き彫りとなった。あらためて被害者およびHIV陽性者支援研修や啓発活動の必要性が明らかとなった。

プログラムは、拠点病院MSWがマイクロの実践経験と、ブロック研修や会議を経て実感している地域性や地域の支援の課題を踏まえて作成した内容であり、参加者の多くから高い評価と満足を得ていた。当事者である被害者や陽性者の講義は、いずれの会場でも貴重な機会として捉えられており、被害者理

解を深めるために不可欠な要素と考えられた。各会場とも会場のある地域からの参加者が多く、グループワークは日頃のネットワーク強化の機会となった。北陸会場では、昼休みに外来見学をオプションとして実施し、日頃診察室内部を見学する機会が得にくい地域支援者に患者の受診環境を理解する好機となった。公益社団法人日本医療社会福祉協会との共催は、全国の非拠点病院等のMSWやその他専門職にHIV/AIDS研修を提供する機会となった。

(2) 薬害被害者支援担当者会議

全国8ブロックで通年事業の会議や研修会に取り入れて実施した（表3）。内容はPMDA事業の説明、実践の共有と課題の検討が多くみられた。さらに被害者との面接時に利用している福祉・介護情報収集シート（非加熱血液凝固因子製剤によるHIV感染血友病等患者の長期療養体制の構築に関する患者参加型研究の成果物）より簡便で被害者自身も持ち帰ることができるようなチェックシートの必要性、被害者支援経験のないMSWや看護師でも、適切に情報収集ができるような面接の手引きの開発が求められた。

D. 考察

(1) 啓発研修の推進

- ① プログラムの作成：地域の実態と生活支援の課題を把握しているブロック拠点病院MSWが、利用者と支援者のニーズに沿い、地域支援体制を強固にする内容を作成できる。
- ② プログラムの内容：講義（人権擁護、HIV/AIDSの最新の動向、ブロックの陽性者・患者動態、医学知識、社会資源、被害者を含むHIV陽性者の語り）と演習で構成する。演習にグループワークを取り入れることにより、地域支援者間のネットワーク構築・強化の機会となる。
- ③ 研修会場：拠点病院が望ましい。日頃診察室内部等を見学する機会が得にくい地域支援者が利用者（被害者およびHIV陽性者）の受診環境を理解する好機となる。さらにブロック拠点病院での開催は、一般的に首都圏に集中しがちな研修の地方開催となり、地方在住の支援者の参加ニーズを満たすものとなる。
- ④ 共催団体：利用者の生活を支援する専門職の理解と受入れ促進、課題の解決に直結する専門職や団体との共催や後援を得ることが有効であ

表3 ブロック別 薬害被害者支援担当者会議

ブロック	開催日	事業名	主な内容
北海道	2018/6/16	2018年度 HIV ブロック拠点病院 ソーシャルワーカー連絡会	薬害被害者に関わる医療費助成制度・福祉制度 PMDA 同意者への実態把握、薬害被害者に関する連絡会
東北	2018/10/13	薬害被害者支援担当者会議	PMDA 事業説明、薬害被害者が利用できる制度
関東 甲信越	2018/7/7	第12回関東甲信越 HIV 感染症連携会議	PMDA 事業説明
	2018/8/4	首都圏ブロックエイズ治療中核拠点 病院会議多職種・行政連携会議	PMDA 事業説明、職種別グループワークで現状を共有
東海	2018/9/10	薬害支援担当者会議 (三者協議後開催)	PMDA 事業説明、中核拠点の状況の共有と担当窓口確認
北陸	2019/2/2	薬害被害者支援担当者会議	医学知識の講義、薬害被害者家族からの話・質疑応答
近畿	2018/10/28	ブロック・中核拠点病院会議	支援の現状報告、大阪医療センターHIV 地域医療支援室 の案内
中四国	2018/10/6	第14回 HIV/AIDS ソーシャルワーカー・看護師ネットワーク会議	PMDA アンケート・事業の説明（不参加の病院にはブロック看護師と SW が出前で説明）
九州	2019/2/9	九州 HIV 看護・MSW 合同研修会	事例検討（8事例のうち2事例が薬害） PMDA 事業説明、社会資源紹介

る。専門職団体の認定ポイント付与の研修に位置付けることにより、参加者のモチベーションが高まる効果もある。

- ⑤ 中核単位における研修：全国的に中核拠点病院が中心となって行政や専門職団体と連携して研修や公開講座を開催している地域も少なくない。中核および一般拠点のMSWの陽性者支援の経験は、首都圏や関西圏を除きブロック拠点MSWに較べると明らかに少なく、HIV/AIDSに特化した情報量やネットワークの緻密さも乏しい可能性がある。しかし中核や一般拠点MSWはHIV/AIDS以外の多様な疾患に対する豊富な支援経験と、様々な地域連携活動から構築されたネットワークを持っている。陽性者や被害者の高齢化による要介護状態や非HIV関連疾患の治療療養には、その地域ネットワークに対象者を取り込み、個別性を尊重した支援が必要とされる。いわゆる「顔の見える関係」のなかで中核

や一般拠点MSWが企画する啓発研修を、ブロック拠点MSWがバックアップする体制を作ることが課題である。

(2) 薬害被害者支援担当者会議

全国8ブロックで実施した。被害者はブロック拠点に集中する傾向があるが、本人の要介護状態や保護者の高齢化により生じる通院負担の軽減を図るため、地元の中核や一般拠点に通院先を変更する可能性も高く、これまで支援経験がないMSWや外来看護師が担当することが想定される。その面接時に使用できる簡便な「社会資源チェックシート」や「面接の手引き」の必要性が高まっている。次年度以降も薬害被害者支援担当者会議をブロック行事に位置付け、被害者支援担当者の資質向上を目指すとともに、支援者が面接時に使用するツールを開発し会議にて共有、試行する流れをつくる必要がある。

E. 結論

ブロック拠点病院MSWは、個別支援から得られた利用者ニーズと、ブロック研修や担当者会議などから把握した支援者および地域のニーズを統合してタイムリーな研修を企画し、自院を研修会場として運営することが可能である。それは各ブロックの課題解決に有効と考えられ継続する必要がある。

血友病薬害被害者の支援は、支援担当者（外来看護師とMSW）会議をブロックの定期事業に位置付け、支援者間のネットワークを構築することで進展する。支援担当者が、被害者の生活をアセスメントする簡便なチェックシートやその使用の手引きの開発が課題となっている。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

参考資料

- 1) 2018年度 人権擁護とソーシャルワーク研修
（広島会場） 社会で自分らしく働くために
～HIV陽性者の就労支援から学ぶ～ 平成30年度 中国四国ブロックエイズ拠点病院
HIV/AIDS ソーシャルワーカー研修会
2018.10.7 （公社）日本医療社会福祉協会共催
- 2) 2018年度 人権擁護とソーシャルワーク研修
（石川会場） 歴史を踏まえソーシャルワークを語ろう 平成30年度 北陸ブロックエイズ拠点病院 ソーシャルワーク・カウンセリング研修会 2018.12.16 （公社）日本医療社会福祉協会共催

- 3) 2018年度 千葉県ソーシャルワーカー三団体合同研修「地域で生きるを支える」 ～明日出会うかもしれないHIV陽性者のために、今できることを考えよう～ 2018.11.4 （一社）千葉県医療ソーシャルワーカー協会、（一社）千葉県精神保健福祉士協会、（一社）千葉県社会福祉士会と共催